



「地球観測・予測データの活用によるSDGs等への 貢献（中間とりまとめ）」（案）の論点について

令和3年12月24日

地球観測推進部会

「今後10年の我が国の地球観測の実施方針のフォローアップ報告書」（令和2年8月28日 科学技術・学術審議会 研究計画・評価分科会 地球観測推進部会）で示された「実施方針を進める上での今後の方向」の以下の4つの項目に沿って、事務局において今期地球観測推進部会の中間とりまとめを作成するに当たり、議論いただきたい論点を整理した。

＜実施方針を進める上での今後の方向＞

- ・地球観測情報をデータ利活用の現場に繋ぐ取組の強化
- ・課題解決を志向した地球観測インフラの長期性・継続性の確保
- ・予測情報の高精度化
- ・共通的・基盤的な取組の推進とイノベーションへの貢献

第9期地球観測推進部会の中間とりまとめに向けた論点

FU報告書項目	論点〈事務局〉
地球観測情報をデータ利活用の現場に繋ぐ取組の強化	<ul style="list-style-type: none"> 地球観測・予測データの利活用によるSDGsへの貢献を考えるに当たり、特に昨今注目すべき国内外動向はなにか。特にどのような「現場（利用者、分野）」による利活用に焦点を当てるか。 専門家ではないユーザー（企業、自治体など）が、地球観測・予測データを社会経済的価値に変換し社会で利活用していくために、どのような取組が必要か。 生物多様性に関する地球観測・予測データの利活用として期待できる「現場（利用者、分野）」はどこか。
課題解決を志向した地球観測インフラの長期性・継続性の確保	<ul style="list-style-type: none"> 地球観測インフラの長期性・継続性を確保するに当たり、どのような視点や国際戦略で捉えるか。官民の連携・分担についてどのような基本的考え方で捉えるか。 我が国の地球観測による連携・貢献について、特にどの国際的枠組みに注目して活動を展開するか。
予測情報の高精度化	<ul style="list-style-type: none"> 研究者が気候予測データの不確実性を低減するという科学的意義を追求する一方で、気候予測データを不確実性があったとしても今すぐ利用したいユーザーがいる状況もあり、両者をつなぐためにどのようなコミュニケーション・対応をとるか。国として対応することはなにか。 気候モデルの初期値に地球観測データが活用されている（データ同化）が、今後どのような地球観測データを活用することが考えられるのか。
共通的・基盤的な取組の推進とイノベーションへの貢献	<ul style="list-style-type: none"> 地球観測・予測データを利活用するための環境は、産学官の連携・分担のもとに効果的な整備が進められているか。その際の課題は何か。（例えば、各種データ（河川・雨量、気象、陸域生態系、海洋観測など）の円滑な利用、商用利用制限、クラウド環境を踏まえた簡便な課金システム、ユーザー利用形態を踏まえたAPI・クラウド環境・計算資源など） 地球観測・予測データを利活用するための環境整備について、企業、自治体を巻き込むために有効な取組・仕掛けは何か。